



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書  |
| Citation         | 研究論集, 23, 363 (左) -371 (左)  |
| Issue Date       | 2024-01-25  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/91114">http://hdl.handle.net/2115/91114</a> |
| Type             | bulletin (other)  |
| File Information | 21_rjgshs_23_p363-371_l.pdf   |



[Instructions for use](#)

# リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

## 文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究科研究プロジェクト「人文学と社会」は、博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより、学生を経済的に支援し、博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに、学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文究院には、令和4年度、172名の博士後期課程の大学院生が在籍し、そのうち7名がリサーチ・アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と、1年間の研究成果の概要報告を、『研究論集』の資料として掲載しています。

# 研究テーマ一覧

令和4年度

| 氏名      | 研究テーマ   | 頁   |
|---------|---|-----|
| 本間 宗一郎  | 考慮における想定に照らしての余地両立論の批判的検討                       | 365 |
| 翁 康健    | 中国社会における宗教による社会事業                               | 366 |
| 袁 嘉孜    | 多和田葉子の作品とドイツ民話<br>—『ふたくちおとこ』を中心として—             | 367 |
| 許 開軒    | 近世長崎におけるニワトリの利用<br>—外国人居留地・町人地・武家地の出土鳥類遺体の検討から— | 368 |
| 新井田 光希  | 知覚および運動タイミングの神経基盤と刺激規則性の関係                      | 369 |
| 山 縣 豊 樹 | ラバーハンド錯覚の「反応者」と「無反応者」：錯覚誘導操作の神経表象に着目した定量的検討     | 370 |
| 菊 谷 敬 子 | 癒し感情を喚起させる色の心理的及び生理的反応の効果                       | 371 |

## 研究成果の概要

|   |                           |
|---|---------------------------|
| 研究テーマ   | 考慮における想定に照らしての余地両立論の批判的検討 |
| R A 氏名  | ほん ま そういちろう<br>本 間 宗一郎    |
| 専攻・研究室・学年   | 思想文化学専攻 哲学倫理学研究室 博士後期課程3年 |
| 指導教員氏名  | 近 藤 智 彦                   |
| 研究成果の概要   |                           |
| <p>この研究の目的は、考慮において想定されている余地——他のようにすることができること——に訴えて、近年新たに現れた余地両立論の一種である局所的奇跡両立論・傾向性両立論・非還元的物理主義に訴える両立論を批判的に検討することであった。この目的を達成するために、考慮において想定されている余地とはどのようなものかを具体的に特定し、その知見に基づいて上述の余地両立論を批判的に検討するという計画を立てた。</p> <p>実際の研究においては、考慮中に想定されている余地を特定するために取り組んだ、考慮の経験についての研究の重要性が判明し、その研究に集中した結果、傾向性両立論と非還元的物理主義に訴える両立論の検討のみに留まった。研究成果は以下の通りである。(1)考慮の経験についての研究を通して、考慮の経験を捉える際には、考慮に関する信念の経験への影響や、考慮の経験についての誤解、考慮の経験の複雑さといった要因が、考慮の経験を正確に把握することの妨げになるということを見出した。また、考慮の経験は多様だと見込まれる上、自由意志は考慮以外の場面でも発揮されるので、考慮の経験は自由意志にとって重要な参照点であるものの、自由意志の問題の全てにけりを付けるものではないということを示した。(2)非還元的物理主義に訴える両立論は、心理学的レベルでの決定論のみに着目して物理的な要素を捨象している。しかしこのことにより、考慮の際に想定されている広い意味での物理的環境が無視されること、及びこの欠落を心的性質の物理的性質への付随に訴えて解消しようとしたとしても、この付随は物理主義の要件を満たしきれない上、余地両立論としても不十分になってしまうことを示した。(3)傾向性両立論は、もし他のようにするよう試みるという刺激が生じると、他のようにするという顕在化を返すように傾向づけられているという仕方では、考慮において想定されている余地を説明する。しかし、こうした理解では刺激が生じ得るかどうかがという点が無視されるため、考慮中においては何らかの心的作用が生じ得る上、その作用が考慮を引き起こしているという前提が捉えられないということを示した。</p> |                           |

|  |                        |
|--|------------------------|
| 研究テーマ  | 中国社会における宗教による社会事業      |
| R A 氏名   | おう 翁      こう けん 健      |
| 専攻・研究室・学年  | 人間科学専攻 社会学研究室 博士後期課程3年 |
| 指導教員氏名   | 櫻井 義秀                  |
| 研究成果の概要  |                        |
| <p>かつての中国の村落社会においては、人々の生活の営みは親族（宗族）組織や地域組織に依存していた。彼らは血縁、地縁を動因として祖先祭祀や神祇崇拜に参加し、そこで得た宗族・地域組織への関わりを通して、生活のサポートを得ていた。しかし近年、中国村落社会では人々は祖先祭祀や神祇崇拜などの民間信仰による束縛から解放され、親族・地域組織への依存が弱まっている。そのため、民間信仰をベースとした親族・地域組織による社会福祉のほかに、他の宗教が社会福祉の補完的役割を担っている可能性が模索されている。</p> <p>それに対して、福建省E村は、祖先祭祀と神祇崇拜といった民間信仰の色が濃い地域である。しかし、近年E村の人々は家庭仏堂（一貫道）に積極的に近づいている。それでは、E村における宗教信仰はどのように展開し、人々の生活の営みとどのようにかかわっているのか。その調査を通じて、中国村落社会における人々の宗教信仰の変容を考察したうえで、村落社会における宗教による福祉を補完する新たな可能性を検討することを目的とする。</p> <p>調査結果として、E村における家庭仏堂は血縁、地縁を土台として宣教を行っている。そのため、共通の関心を持つ人々は家庭仏堂の活動への参加を通じて、再び血縁、地縁を結び、家庭仏堂によるネットワークが築かれる。かつ、家庭仏堂は、敬老の日・母の日において、E村で福祉サービスを提供していることも見られた。このように、家庭仏堂での血縁、地縁に基づく結社は、家族、地域組織の変わりに、福祉を補完する可能性が見出される。</p> <p>宗教信仰が多様化している背景において、中国村落社会の人々は自らのライフスタイルに基づき、血縁、地縁をベースとして、共通の関心を持つ人同士で集まり、宗教を選択している。民間信仰以外の宗教が選択される場合も、中国村落社会の血縁、地縁が再び結ばれ、親族・地域組織とは異なるネットワークが築かれている。そして、宗教ネットワークによって村落社会の福祉を補完する可能性が見出される。血縁、地縁に基づく親族・地域のネットワークだけでなく、外部とつながりへの考察は今後の課題とする。</p> |                        |

|   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| 研究テーマ   | 多和田葉子の作品とドイツ民話<br>—『ふたくちおとこ』を中心として— |
| R A 氏名  | えん か し<br>袁 嘉 孜                     |
| 専攻・研究室・学年   | 人文学専攻 映像現代文化論研究室 博士後期課程3年           |
| 指導教員氏名  | 中 村 三 春                             |
| 研究成果の概要   |                                     |
| <p>本研究の目的は、多和田葉子『ふたくちおとこ』（1998）の三つの短編作品、「ふたくちおとこ」と「かげおとこ」、「ふえふきおとこ」を、第二次テキストの理論から分析することで、初期の多和田文学の創作原理を明らかにし、多和田文学とドイツ民話との関わりを解明することであった。「ふたくちおとこ」の研究では、民衆本『テイル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』との関わりを分析した。民衆本『テイル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』は、1990年に岩波文庫によって出版された阿部謹也訳と、1979年に法政大学出版局によって発行された藤代幸一訳との二つの和訳本がある。これらの三つの作品の読解および比較によって、「ふたくちおとこ」におけるイペルテキスト〔重ね書き〕的实践的手法を分析し、研究成果として、作品の生成原理及び原典の異同を把握することができた。一方、「ふたくちおとこ」は、戯曲「テイル」のシナリオから改編されたものでもある。この二つのテキストを比較することによって、「ふたくちおとこ」の第二次的テキストの特徴を明らかにすることができた。「ふえふきおとこ」の研究では、ドイツ伝説の「ハーメルンの子どもたち」の物語との比較によって、多和田文学におけるもう一種の第二次テキストの様式を見出し、それを分析することができた。「かげおとこ」の研究では、ドイツ民話の中からその原典を見出す計画であったが、「かげおとこ」は、ドイツ民話とはほとんど関わりを持っていないとわかった。その話は、ヨーロッパの大学に通った最初のアフリカ出身者であると知られている、Anton Wilhelm Amo というガーナ出身の哲学者のプロフィールを下敷きにしたものであると推測することができ、研究成果をあげられた。しかし一方で、この研究の中で、伝説、民話、民衆本などの用語の流用について厳密に整理できておらず、更なる定義が必要とする。以上、不完全な部分はあるものの、研究全体から見れば、初期の多和田文学作品の創作原理と独自性の一端を明らかにすることができた。本研究成果は、博士論文の第三部に組み込む予定である。</p> |                                     |

|           |  |
|-----------|--|
| 研究テーマ     | 近世長崎におけるニワトリの利用<br>— 外国人居留地・町人地・武家地の出土鳥類遺体の検討から —  |
| R A 氏名    | きよ かい けん<br>許 開 軒  |
| 専攻・研究室・学年 | 人文学専攻 考古学研究室 博士後期課程3年  |
| 指導教員氏名    | 江 田 真 毅  |
| 研究成果の概要   | <p><b>【研究目的】</b> ニワトリは現在日本でもっとも多数消費されている家畜である。歴史学および考古学の知見から、ニワトリが食材として普及したのは19世紀以降であり、それ以前に主に食用となっていたのは野鳥だったと考えられてきた。また、利用対象となったニワトリは現代のように若鳥または雌鶏に限ったものではなかったことが知られている。しかし、これらの知見は主に近世江戸に所在した武家地と町人地に着目した結果であり、江戸時代にニワトリの利用が各地でいかに普及していったかはよく分かっていない。その解明には江戸以外の地域の鳥類利用について比較検討する必要がある。とくに、江戸時代に外国人との貿易が唯一許可された長崎は注目すべき地域と考えられた。そこで、本研究では、近世長崎の外国人居住地・町人地・武家地におけるニワトリ利用パターンの解明を目的とした。</p> <p><b>【研究計画】</b> 出島和蘭商館跡（オランダ人居住地）、魚の町遺跡（町人地）、長崎奉行所遺跡群（武家地）の出土鳥類遺体を分析対象とした。ニワトリの性別、年齢、解体痕および骨格部位組成の検討から、(1)利用された鳥類の種類とその時間的変遷、(2)ニワトリの性比と年齢構成、(3)解体・流通のパターンの観点から近世長崎における各身分の人のニワトリの利用状況を明らかにすることを計画した。</p> <p><b>【研究成果】</b> 研究対象とした3つの遺跡では、ニワトリは江戸時代を通じてもっとも頻繁に利用された鳥類であったことがわかった。また、資料数の多かった出島和蘭商館跡と魚の町遺跡では、食用とされたニワトリには、幼鳥・若鳥と産卵期の雌鶏が多数含まれていたことがわかった。一方で、17世紀に比べてそれ以降の時代では幼鳥・若鳥は減少し、産卵期の雌鶏の割合は増減する時期差が認められた。さらに、解体痕と骨格部位組成の分析から、調理の過程で「胸肉」と「手羽」は切り離されたことが多かったこと、ニワトリは足の「もみじ」がついていない状態で搬入された場合があったことなどが推定された。</p> |

|  |                                     |
|--|-------------------------------------|
| 研究テーマ  | 知覚および運動タイミングの神経基盤と刺激規則性の関係          |
| R A 氏名   | にいだ みつき<br>新井田 光 希                  |
| 専攻・講座・研究室・学年   | 人間システム科学専攻 心理学講座<br>心理学研究室 博士後期課程3年 |
| 指導教員氏名   | 小川 健 二                              |
| 研究成果の概要  |                                     |
| <p>人が時間を測り行動のタイミングを合わせることがどのように実現されているかについては、神経科学的研究によって関連する脳領域などが明らかになってきているものの、統一的な見解を得るには至っていない (Ivry and Schlerf, 2008)。時間処理の文脈は様々あり、例えば、時間間隔の長さの判断 (知覚タイミング) と自身の運動で特定の長さの時間間隔を生成すること (運動タイミング) の違いや、音や光などの刺激が時間的規則性や周期性を持つとき (規則的状況) と持たないとき (不規則状況) の違いなどが挙げられる。</p> <p>本研究では、時間処理の中でも特に、1秒以下の短い時間間隔における、知覚タイミングと運動タイミング、および、規則的状況と不規則状況の違いに着目し、これらの比較を通して時間処理のための脳のシステムを明らかにすることを目的とした。知覚タイミングで規則性の違いについて検討した fMRI 実験では、小脳と大脳基底核の活動における差が確認されており (Teki et al., 2011)、本研究ではこれが運動タイミングにおいても同様に確認されるかにも注目した。この目的のために、刺激条件 (規則的/不規則) とタイミング課題条件 (知覚/運動) の2要因参加者内計画で fMRI 実験を行った。参加者には、規則的か不規則な聴覚刺激に対して、時間の長短の判断 (知覚タイミング課題) か同じ時間長の運動の生成 (運動タイミング課題) を MRI の中で行なってもらい、その際の脳活動を記録した。</p> <p>その結果、知覚タイミング課題の刺激条件間の比較で、小脳や大脳基底核に関連した脳活動が見られず、先行研究を再現しなかった。また、課題間の比較において、回答の際の指運動の影響とみられる活動が最も強く結果に反映された。従って、本実験では、目的としていた時間処理に関連する脳活動を適切に得られていなかった可能性が高い。この問題を解決するために、課題を改善し、知覚及び運動タイミング間の条件をより統制する必要がある。</p> |                                     |



|   |   |
|---|---|
| 研究テーマ   | ラバーハンド錯覚の「反応者」と「無反応者」：<br>錯覚誘導操作の神経表象に着目した定量的検討 |
| R A 氏名  | やま がた とよ き<br>山 縣 豊 樹                           |
| 専攻・研究室・学年   | 人間科学専攻 心理学研究室 博士後期課程3年                          |
| 指導教員氏名  | 小 川 健 二   |
| 研究成果の概要   |   |
| <p>本研究の目的は、手を「所有している」という感覚（手に対する所有感）を支える神経基盤を探ることであった。視覚-触覚や視覚-運動の同期性を利用した簡単な実験操作によって、手の模型などの「偽物の手が自分自身の手である」かのように、あるいは、画面に映った「本物の手が自分自身の手でない」かのように感じられるラバーハンド錯覚は、変わりえないように思われる手に対する所有感が容易に変容しうることを示唆する現象としてよく知られている。しかし、そのメカニズムは未解明の部分も多く、例えば、誘導操作が異なる場合でも脳内では類似のパターンで情報が表現されているのか(共通の神経表象が存在するか)や、誘導操作に対する個々人の反応性（所有感の錯覚の感受性）と誘導操作の神経表象との関係は、よくわかっていない。そこで、触覚刺激（筆なぞり）と手指運動（タッピング）という二種の操作によって所有感の錯覚を誘導し、機能的核磁気共鳴画像法（fMRI）を用いて脳活動を計測した実験のデータから、共通の神経表象を有する脳領域を検討するとともに、感受性との関係を探った。マルチボクセルパターン分析と呼ばれる脳活動パターンの多変量解析の結果、両側運動前野、両側頭頂間溝、左有線外皮質身体領域の関与が示された。これは、触覚誘導と運動誘導を個別に扱った先行研究の知見とも整合している。さらに、相関分析の結果、左運動前野における触覚誘導と運動誘導それぞれの神経表象の共通性と、事後アンケートで測定した所有感の錯覚の感受性の間に、正の関連性が示された。つまり、神経表象の共通性が高い個人は、所有感の錯覚を体験しやすい「反応者」である（あるいは、その逆）という傾向が確認された。これらの結果は、運動前野が手に対する所有感の神経基盤であることを示唆している。以上の成果は、これまでのfMRI研究から導かれた所有感の神経基盤に関する洞察を、より精緻な知見によって補強するものである。しかし、本研究の遂行を通じて、方法論のレベルや他の手法を用いた先行研究の知見との整合性の観点での課題も明らかとなった。今後はそれらの改善を試み、さらに精緻化された研究を継続していく。</p> |   |

|  |                               |
|--|-------------------------------|
| 研究テーマ  | 癒し感情を喚起させる色の心理的及び生理的<br>反応の効果 |
| R A 氏名   | きく や たか こ<br>菊 谷 敬 子          |
| 専攻・研究室・学年  | 人間システム科学専攻 心理学研究室 博士後期課程3年    |
| 指導教員氏名   | 川 端 康 弘                       |
| 研究成果の概要  |                               |
| <p><b>【研究の目的】</b><br/>本研究は、「癒し感情」と「色彩」との関係に焦点を当て、色彩が人に与える「癒しの効果」と「癒される色彩」の特徴について、心理的及び生理的側面について客観的に検討を加えることを目的とする。</p> <p><b>【研究計画】</b><br/>単色と多色配色の癒し評価実験の結果について分析を行い、単色と多色配色における癒される色彩の差異や共通性等の特徴を多面的な側面から検討する。次に、癒しから連想される事象に関する意味ネットワーク構造を検討し、評価者自身の認知過程の影響について検討を行う。</p> <p><b>【研究成果】</b><br/>癒し感情の特徴について検討した成果としては、癒し感情は心理学で分類されている基本感情の一つではなく、基本感情の中での肯定的な感情について幅広く内包する感情が癒し感情であることが示唆された。また、癒し感情の効果は心理的にも生理的にも影響を及ぼすことが明らかにされている。さらに、癒される色彩の心理的な効果と評価者の認知過程の構造および影響に関する成果は次の通りである。つまり、色相は明度、彩度、色相の三つの属性を持ち、その明度については、癒されやすい色彩は明度の低い色彩よりも明度の高い色彩の方が癒し感情が喚起されやすいことが示唆された。彩度については、中明度以上であれば彩度が低い方が癒し感情が喚起されやすい場合がある一方で、彩度が高い方が癒し感情が喚起されやすい場合もあり、色相によっては異なる傾向が示された。癒されやすい色相については、緑が有力であるが、自然を中心とした概念によって評価者の癒しの意味ネットワークを構成していることが確認されたので、自然に関係のある緑がトリガーとなり、癒しの構成概念同士を活性化させた可能性が想定される。つまり、評価者の認知の過程によって癒し感情の喚起に影響を及ぼすことが示唆された。</p> <p>どのような癒しの要素により色彩の癒しが構成され、どのような効果や特徴を持つかについては、色彩によって癒しの構成要素が独自に異なって構築されていることが示唆された。ただし、単色や多色配色に関わらず、暖色らしい特徴と寒色らしい特徴の効果については普遍的に表れることが示唆された。</p> |                               |